

春分が近づき、北極圏にもゆっくりとした季節の変化が訪れています。長い冬のあいだ支配的だった闇は少しずつ後退し、昼の時間が目に見えて伸びてきました。かつては一日中暗かった空にも、夕暮れの名残が残るようになり、地平線近くがほんのりと明るさを帯びています。そんな「夜と昼の境目」のような時間帯に、オーロラは静かに姿を現します。

この時期のオーロラには、冬とは異なる特徴があります。空の低い部分は淡い緑色に輝きながら、上空に向かうにつれて紫色を帯びていきます。これは高高度の大気で発光する窒素の影響であり、春先ならではの色彩です。まだ完全な闇ではない空に浮かぶため、その色の変化は一層繊細に感じられます。まるで夕焼けと夜空のあいだに、もう一つの光の層が重なっているかのようです。

湖畔に立つと、雪に覆われた大地はわずかに青みを帯び、遠くの灯りが温かく瞬いています。その上に広がるオーロラは、静寂の中でゆっくりと形を変えながら、空全体を舞台にした光の演舞を見せてくれます。風の音もほとんどないこの場所では、時間そのものが緩やかに流れているように感じられます。

しかし、この美しい光景も永遠ではありません。オーロラの観測シーズンは、およそ4月中旬まで。白夜が近づくにつれて夜は失われ、やがてオーロラは姿を見せなくなります。だからこそ、この「春のオーロラ」はどこか名残惜しく、特別な輝きを放っているのかもしれない。もうすぐ、この光景ともしばしのお別れです。

(2026年3月中旬/スウェーデン・ヨックモック郡・ポルユス駅/東京から遠隔観測)

